

MVP開発は、 どこまで作るのか。

PoC・アジャイルとの違いと、範囲の決め方

この資料で分かること

- MVP・PoC・アジャイルの違いと使い分け
- 「最小限」をどこで線引きするか
- 数週間で最初の一つを出すための工程
- 現場に使ってもらうときの進め方
- 続ける・変える・やめるの判断材料

オブティソース株式会社 / 2026年版

MVPは「機能を減らした安い開発」ではありません。何を確かめたいのかを先に決め、それを確かめるのに必要な最小限だけを作る進め方です。確かめたいことが決まっていなまま機能を削ると、**誰にも使われない中途半端なもの**ができあがります。

MVPで決めるのは機能ではなく「確かめたいこと」

最初に置くべきなのは、この業務の時間が半分になるか、現場が毎日使うか、といった問いです。問いが決めれば、必要な機能は自然に絞られます。逆に機能一覧から入ると、どれも捨てられなくなり、結局は通常の開発と変わらない規模になってしまいます。

PoCとの違いは「業務で使うかどうか」

PoCは技術的に可能かを確かめる実験で、業務では使わない前提のものも含まれます。MVPは実際の業務で使うことが前提です。PoCで終わって現場に届かない、を避けたいなら、最初からMVPを目標に置いてください。

01

確かめたいこと

成功と言える数字を1つ決めます。ここが決まらないと、機能を削る基準も決まりません。

02

毎日使う人

誰が触るのか。特定の1人まで絞れると、作るものが自然に決まります。

03

やめる基準

何が起きたら中止するか。始める前に決めておくと、判断が感情に寄りません。

最初の一つを出すまでの5工程

工程	やること	目安
確かめたいことを決める	誰のどの業務を、どう楽にするか。成功と言える数字を1つ置く	1週間
範囲を絞る	その数字に必要な機能だけ残す。あれば嬉しいものは全部後回し	数日
動くものを作る	AIツールを使い、実際に触れるものを短期間で形にする	2〜4週間
現場で使ってもらう	限られた人数で実業務に使う。使われ方と不満を集める	2〜4週間
続ける・変える・やめる	最初に置いた数字と照らして判断する	1週間

範囲を決めるときの8つの問い

- ✓ 誰が毎日使うのか

使う人が特定できないなら、まだ作る段階ではありません。
- ✓ データはどこにあるか

手入力から始めても構いません。連携は後で足せます。
- ✓ 今はどうやっているか

現行のやり方より明らかに楽でなければ使われません。
- ✓ 失敗したら何を失うか

小さく作る目的は、やめる判断を安くすることです。
- ✓ 何を数えれば分かるか

時間・件数・ミスの数。測れないものは判断できません。
- ✓ 誰が現場に説明するか

導入の音頭を取る人がいないと、使われないまま終わります。
- ✓ 無くて困らない機能は

権限管理・帳票出力・通知は、後からでも足せます。
- ✓ 次の一手は決めてあるか

うまくいったときに何を広げるかを先に考えておきます。

2週間で見せる

資料ではなく動くもので合意します。認識のずれが早く見つけられます。

使う人を巻き込む

作ってから見せるのではなく、作りながら触ってもらいます。

捨てる前提で作る

最初の版は捨てても惜しくない規模にします。

やめる基準を先に置く

始める前に決めておかないと、途中では決められません。

MVPの成否は、**作る前に「何を確かめるか」を決めたか**で決まります。確かめたいことが1つに絞れていれば、数週間で最初の判断材料が手に入ります。当社ではこの工程をご一緒しながら、**初期10万円〜・月額10万円〜**でお引き受けしています。

相談は無料です

現状を伺ったうえで、やらない方がよい場合はその理由をお伝えします。／ optisource.co.jp